

〈論 文〉

中上級日本語学習者の意見文に見られる段落意識

李 宗 禾

キーワード：意見文，段落，形式段落，意味段落，文章構成

1. はじめに

文章とは、形式的な面からみれば、「文」という単位から出来上がるものである。しかし、単なる文の羅列だけで文章としては成り立たない。それらの文は、内容の統一性のあるものでなければならない。つまり、文章はただ文字という媒体による産出物ではなく、その作成には適切な語彙や語句を選択する上で、文のつなぎ方や、文脈展開の仕組みなど、数多くの要素がかかわっているのである。

また、文章は、ことばの使用のみならず、表現の仕方だけで問題になる場合もある。外国語学習者の作文においては特にそういう問題点が指摘される。できあがった文章の中で語彙や文型が正確に使用されていても、文間の意味的なつながりが悪かったり、論理の展開上に不都合が生じたりする場合や、構成から見て段落相互の関係が不明瞭で、リズム感の悪い文章になってしまうなど、ことばの表現技法によるぎこちなさが生まれることがある。したがって、文章を書くことは非常に困難で、言語の四技能でもっとも学習時間を要する言語活動である。

これまで外国語学習者の作文を研究対象とする場合、表記のし方や、語彙力及び文型にかかわる運用の問題、文法の正確さなど、語学知識面を重点的に扱う研究が多かった。本稿では構成面に目を向け、文章における段落の相互関係に焦点を当てて考察を進めることにしたい。具体的に台湾人日本語学習者の作文を考察材料とし、その中の段落配置の仕組みを分析することを目的とする。考察結果に基づき、学習者が文章を書く際の段落意識を明確にさせ、今後の教材づくりや、作文指導に役立てたい。

2. 先行研究

段落構成の重要性は文章表現教育の分野においてよく語られている。特に日本文部科学省によっ

て公示される各教育段階の学習指導要領解説（国語編）⁽¹⁾ の中では、適切な段落の作成が学習項目の一つとして明示されている。そういう段落作成の意識形成の過程を通して、小学生作文能力の発達に関する縦断的な研究がある。田中（1998）では400字以内という条件で書かせた作文を段落の2つの要素である「内容上」と「形式上」から習得していく過程を観察した。その結果、形式の習得について「改行」意識は三年生のとき最も頻繁におこり、「改行一字下げ」という形式は、四年生の段階でほぼマスターされていることがわかった。内容上の小主題によって統一するという意識の形成については、「一文改行」、「接続語による改行」という経過が見られた。「事柄の変化による改行」という意識はほぼ習得されているが、自分が述べようとするものの「想の展開」という点での改行意識は不完全である、という結果を得た。

また、秋田・久野（2001：166）では文や段落のつながりの悪い文章は読み手の理解に支障を与え、わかりにくさに関わるものとして考えられる、と述べている。

金（2006）は韓国人日本語学習者の文章を調査資料とし、言語的と認知的の両側面から文章理解との関係を考えて。研究結果によると、読み手にインプットされた文章情報は短期記憶、長期記憶の順に処理され、また、長期記憶の中での形式スキーマを活性化させる段階で理解を妨げる要因がなければ、読み手は内容スキーマを活性化させ、推論を行うことがわかった。この一連のスキーマ駆動のプロセスによって読み手が情報を読み取るのである。よって、読み手（特に母語話者の読み手）は学習者の書いた文章を読む際に、その骨組みとなっている文章構成が自分の中ですでに蓄積された、いわゆる形式スキーマと不一致が起こった場合、混乱や戸惑いを起こす恐れがあると想定されよう。

槌田・今井（2008）では留学生の文章のわかりにくさの原因が一文レベルでの複数の階層で生じた間違いと長文でのつなぎ方の間違いのほか、文章構成に問題があると指摘している。分析結果によって、段落数に問題がある⁽²⁾と考えられる文章は全体の約3割であるが、段落の区切り方や構成上に何らかの問題が見られたものは全体の8割を占めていることがわかった。それをさらに「区切る場所の間違い」「区切りすぎ」「区切りなし」「必要要素なし」⁽³⁾「区切り不明」と5つに分類すると、「区切り不明」のものが文章構成の問題の中で最も多いことがわかった。結束性を明確にする言語的要素を意識的に使って段落を構成する指導や、アウトラインを作成し、論理的な思考力を高める練習も必要だと呼びかけている。

以上見てきたように、文章全体の構成を捉えるのに段落の構成が重要な手掛かりだということを理解した。本稿ではこれらの研究から得た知見の下で、台湾人日本語学習者の文章に見られる段落分けのパターンを手掛かりにし、段落意識を探る。

3. 調査概要

3.1 段落について

段落は一つの文からなるものがあるが、多くの場合、いくつかの文が集まって一つの意味的なまとまりになるものを指す。『国語学研究事典』(1996:186)によれば、次のようなことがわかる。

文章が、主題に従って一貫した意味を表現するため線状的に展開して行く経路には、起伏曲折があり、それに応じて文章はいくつかの区切れを持つ。この区切れは、文章を構成する部分として、文章全体の主題につながる小主題をもってまとまっている。この意味上首尾一貫した一つの統一体としての文集合を段落という。

また、段落には①内容上、小主題によって統一されている、②形式上、改行一字下げにして示す、という2つの要素がある、と述べているのは市川(1978)である。前者は「意味段落」と呼ばれ、後者は「形式段落」と呼ばれることがある。「形式段落」は段落の冒頭に「改行一字下げ」が行われるという規範があるため、必ず一つの段落によって成り立つが、「意味段落」は一つの段落からいくつかの段落が内容上の連関からまとまった「大段落」のこともある。

平井(1958)では文章表現の立場から段落の性質や段落分けのパターンを次のように整理している。

- (1) 小説や物語などでは、時刻や場面や動作や人物を変えるときに、新しい段落にするとよい。
- (2) 感想文では、対象やフニイ気や立場や見地を変えるときに、新しい段落にするとよい。
- (3) 説明文では、新しい考えや新しい段階に移るときに、新しい段落にするとよい。
- (4) 会話文では、話し手が変わるときに、新しい段落にするとよい。
- (5) ある段落の考えとつぎの段落の考えの間に飛躍がありすぎるときに、その2つの段落の間に橋渡しの段落をおくとよい。

本稿では市川氏が取り上げた「形式段落」と「意味段落」に従って考察を行う。「形式段落」に関しては単なる段落の数の問題であるが、今回は段落の長さも含めて集計する。「意味段落」に関しては、平井氏の見解を参考にすが、具体的な考察方法を示唆している田中(1998)及び樋田・今井(2008)の分類も考慮に入れて検討する。

3.2 調査対象者

調査対象者は台湾・台北近郊の大学で日本語を主専攻とする3年生の学習者で、計29名である。日本語のレベルは中・上級に当たる。対象者の学習歴や日本語能力などの詳細は表1のとおりである。

表1 調査対象者（29名）の基本資料

性別	学習歴	留学経験	日本語能力試験	書く能力（自己評価）
男性 6	3年未満 21	有 0	一級 3	優 0
女性 23	3-6年 8	無 29	二級 7	良 6
			三級 1	可 16
			受験予定 18	劣 7

3.3 調査用資料

本稿で調査に使った文章は上記の29名の学習者が書いた意見文である。調査の詳細は次のとおりである。

- (1) 調査時間：2009年9月
- (2) 文章作成に与えた時間：50分
- (3) 文章作成の場所：教室内
- (4) 字数制限：400字詰め原稿用紙2枚以内
- (5) 課題：原則的に学習者個人の表現意欲を尊重するため、自由課題という形で行った。必要に応じて、課題リスト⁽⁴⁾を提示した。
- (6) 辞書・参考書の使用：可

4. 結果および分析

4.1 形式段落

この節では形式上の段落実態を見る。

学習者29編の作文（平均字数350字）での段落数及び長さの集計結果は、表2に示すように、3段落構成の文章が最も多く、全体の45%を占めることが確認される。それを4段落構成の文章と合わせて見ると、全部で22編あり、全体の7割を超えた。「序論—本論—結論」または「序破急」の3部構成や、「起承転結」の4部構成などが説明文や意見文などの論理的な文章の作成技法としてよく取り上げられている。とくにそもそも漢詩の構成でもある「起承転結」は中国語作文の表現技法として一般に知れ渡っているものである。今回考察に使用した作文を単なる形式から考えてみれば、7割以上の文章が3つか4つの段落に分けて書かれた結果は、大半の学習者に文章の構成についての基本認識があることを示している。しかし、構成として最も不適切だと思われる1段落構成の文章が4つあり、それがやや適切ではない2段落構成と5段落以上の構成を合わせて全体の2割弱だという結果が表2を通じて分かる。これによってまだ一部の学習者が明確な段落意識を持っていないと考えてよからう。

表2 段落の数及び長さ

段落数	人数	段落毎の字数	2段落構成	3段落構成	4段落構成
1	4	150未満	1	34	35
2	2				
3	13	150 - 350	3	5	1
4	9				
5以上	1	350以上			
平均	3.1				

段落の長さについて、平井（1958：171）では「説明や論説の文章では、百五十字から三百五十字ぐらいのところがある考えをまとめて述べるのに適当な長さの段落ということになる」という見解を示した。今回考察に当たる29の作文の平均字数は350字である。よって、各段落の長さが若干短めのものとなっている。150字未満の段落が圧倒的多数を占める。

4.2 意味段落

形式段落の考察を通して、大半の学習者は改行意識が高いという結果を得た。この節では段落の内容から学習者の改行意識を掘り下げる。形式の改行と内容の改行が一致しているのであろうかを見るのが主な目的である。

考察は3部構成と4部構成の作文に分けて行う。

4.2.1 「序論」「本論」「結論」を示した三部構成

論理的な文章は「序論」「本論」「結論」の順に3つの部分で構成されるのが普通である。序論にあたる部分ではこれから論ずるテーマの背景説明や専門用語の解説をし、それから問題提起を行う。つまり、論題についての一般的な記述と問題点の指摘が序論の役割である。本論では序論で問題意識として取り上げられたことについて筋道を立てて書く。具体的な事実や根拠に基づき、書き手の主張や意見を述べるのが大事である。結論は書き手が立てた問いに対して答えをまとめる部分である。これで「序論」「本論」「結論」の3部構成は論理的な文章の典型的な構造であり、文章の組み立てを決める主なものである、ということを理解した。

以下では学習者の意見文における段落について、「序論」「本論」「結論」の役割を押さえながら、それぞれの実態を見ていく。「序論」から「本論」へ、それから「本論」から「結論」への改行パターンを、「論理的な標識を使用する」タイプと「事柄または話題の変化を示す」タイプに大別する。「論理標識を使用する」タイプとは、接続語句、または結束性を与えるための言語的な手段が用いられたことを指す。このタイプについては、論理標識の使用と述べられた内容と噛み合っているかが検証のポイントとなる。「事柄または話題の変化を示す」タイプについては、ひとつの事柄はひとつの段落に書くという原則に従い、検証していく。ただし、文章のはじめとなる「序論」の段落に関しては、どのような内容が書かれたのが考察の要点となる。

表3 三部構成の意見文に見られた改行パターン

		問題なし	問題あり
序論	背景説明のみ		7
	問題提起のみ		
	両方行う	5	
	その他		7
		26%	74%
本論	接続語句	2	1
	事柄・話題変化	14	2
		84%	16%
結論	接続語句	3	2
	事柄・話題変化	7	7
		53%	47%

* 文章数：19

表3に示すように、「序論」の内容に問題点が見られたのは75%近くであり、序論の役割に対する認識不足の傾向が窺える。これに対し、「序論」から「本論」へと改行するところでの区切りの間違いは最も少なく、16%のみであった。「本論」から「結論」へと改行するところでは全体の半分近くに何らかの問題が起きており、結論の働きを正確に把握していないと考えられる。以下で順を追って見ておこう。

まず、序論に見られた問題点である。すでに述べたように、序論ではテーマに関する背景や現状など一般的な事柄を説明してから問題提起を行うのである。学習者の序論で「背景説明」しか行われていないものが7例あった。そのうちの2例を挙げる。

例1 毎日MRTを利用するので、MRTはいろいろなタイプの台湾人があるような小さい教室と
考えである。MRTの中で、いつも携帯を使って、大きい声を作って、ほかの人が目にしない
人がある。公共乗り物内で、携帯電話の利用とマナーに対して、法律に管理されないでも、電
車の中で、公共乗り物 の乗り方で説明がある。

(テーマ：公共乗り物内での携帯電話の利用とマナー・序論 C21)

例2 現代的な社会は世界の変化とともに変わってあります。今、人々はインターネットでいろ
いろな国のニュースや資料などを調べることができます。そして、国々がお互いに知り合う
ために、英語は世界で主な言語として使われています。

(テーマ：大学で英語を必修科目にすべきか・序論 C47)

この2つの例ともテーマに関する現状の紹介に止まってしまい、さらに大事な何かを訴えかけてくるようなものが見られない。とくに例2の学習者の作文では本論においても英語に関する背景説明が続いており、次のようなことが書いてある。

例3 台湾で両親は子供の英語の教育を重視します。幼稚園から英語を習ってくれる場合も多くあります。義務教育の中で英語も必修科目であります。英語は世界中に普及しました。それだから、政府も親たちも英語の教育を重視します。

(テーマ：大学で英語を必修科目にすべきか・本論 C47)

例3に示した段落の内容は序論の話を受け、再び英語が世界で占める地位を述べるものである。これによって内容上の重複が発生し、不適切な構成による冗長表現になっていると考えられる。

「その他」とは背景説明も問題提起もなく、文章の最初から具体的な事実と意見の陳述が行われたタイプである。全部で7例あるが、次のようなものが挙げられる。

例4 大学に入っている前に、六年以上英語を勉強していて、各大学の各学科も英語のレベルを設定しますから、大学で英語を必修科目にする必要がありませんと思います。

(テーマ：大学で英語を必修科目にすべきか・序論 C29)

例5 今度の夏休みに新戚^{ママ}の結婚式へ行きました。それをきっかけに、ブーケ^{ママ}スをキャンセルした方がいいと思うになりました。花嫁がブーケを投げ、参列者たちがブーケを取るのは面白いことだが、実に迷惑なこともあります。

(テーマ：外来文化を取り入れた結婚式実に迷惑・序論 C06)

例4の段落は1文からなっており、「大学に入っている前に、六年以上英語を勉強していて、各大学の各学科も英語のレベルを設定します」の部分は文頭から唐突に書き手の主張を支持するための理由を説明していると判断され、「英語を必修科目にする」という事情の背景説明とは考えがたい。また、例5の段落では、テーマに呼応するような外来文化の受容に関する内容が全く触れられておらず、単なる「今度の夏休みに新戚^{ママ}の結婚式へ行きました。」と書き手自身の経験を述べるだけに終わってしまう。このように、書き手個人の意見や、その根拠となる経験、または事実に関するものの提示は、本論で行われるのが適切である。

続いて、「序論」から「本論」への改行パターンを見る。

「序論」から「本論」への改行においては、「事柄または話題の変化を示す」というタイプが最も多く使用されており、事実及び意見の組み合わせによって構成されるものが殆どである。このタイプで改行の問題点として見られるのは、例3ですすでに触れたように、序論で行われるべきである背景説明が本論で繰り返された例である。また、不適切な接続語句の使用が1例ある。その不適切な箇所を指摘するために、以下の引用では序論の段落から提示しておく。(下線は筆者による)

例6 今の時代、学生にとって、一番大切な言語は英語だと思います。小さいからずっと英語を勉強しています。毎週六節のクラスがあります。学生にとって、とても大切です。英語は全世界一番役に立つの科目ですから、勉強は必要です。

しかし、大学の時、各学生は違う学系が入りますから、専門の科目はもちろん違います。その時、英語を無視されます。大学の本はいろいろあります。普通、英語で書きます。だから、英語がわからないから、本の内容がわかりません。英語の能力はとても大切です。英語の習ぶ道はつづけているのは必要です。言語の勉強は断われない。もし、止めたら、すぐ英語の能力が退歩します。だから、英語の習ぶ道はつづけています。

(テーマ：大学で英語を必修科目にすべきか・序論・本論 C32)

例6は、序論のところすでに事実と意見が述べてあり、本論に入って「しかし」という逆接の接続詞の使用によって文脈を転じさせるものだと推定する。この2つの段落が共に本論に位置するのならば問題がないが、それぞれ構成上から見て文章の序論と本論に書いてあるため、構成に合った表現内容とは考えられない。

最後に、「本論」から「結論」への改行パターンを検討する。

ここでは全ての段落をまとめる言葉として捉える「このように」「以上」のような論理的な標識の使用が3つ見られた。3例とも語彙が示す論理関係と表現内容が一致する。それに対し、論理的な標識の不適切な使用例が2つあった。添加を表す「その上」および逆接を表す「とはいっても」がそれぞれ1例が見られた。以下では逆接の例を取り上げる。

例7 とはいっても、留学は絶対に悪いことではありません。ほとんどの子供にとって、留学した経験は役に立つのです。ですから、子供を留学させるべきかどうか、やはり親たちはちゃんと子供に聞いて、子供にとって一番いい道を選ぶのです。

(テーマ：子供を留学させるべきか・結論 C34)

これは、「とはいっても」という逆接を表す接続語句による本論への反論と全体のまとめを同時に結論で示した例である。この文章の本論では子供を送り出す保護者の心配や留学先で起こりうる問題などについて語られているが、次のまとめを示すべきである段落の文頭で「とはいっても」によって先行文脈から一転し、留学のいい点を述べる。ここで「転」を入れることに読者を惹くような効果が見られず、賛否を表明しないという結論が逆に読み手に戸惑いを与えてしまうのである。

また、結論とはまとめに入るべき段階のことであるが、そこに本論の続きとして第二の意見を書いてしまうという問題点が見られる。一つの事柄は一つの段落に書くという段落意識が十分育っていないことを示す。例として次のようなものが挙げられる。

例8 私は携帯電話の利用のマナーに重視する。なぜなら、いつも MRT 内で大きい声に影響されるからです。このマナーは他の人に対して同理心を培うとして重視されるのは大切だと考えである。

(テーマ：公共乗り物内での携帯電話の利用とマナー・結論 C21)

例9 ブーケトスは元々欧米で一般的な習慣なのに、どうして台湾でそういう風にやらなくてはいけないでしょう。ブーケを取っても、きっと次に結婚するという絶対な保証もないし、かえって、家族に期待されて、凄くプレッシャーを与えるでしょう。そういうわけで、私はブーケトスに反対します。

(テーマ：外来文化を取り入れた結婚式実に迷惑・結論 C06)

この場合は新しい段落を設け、意見と結論の話しを分けて述べるとよいであろう。

4.2.2 「起」「承」「転」「結」を示した四部構成

すでに触れたように、日本語の作文技法や4コマ漫画の展開として取り上げられる「起承転結」は、そもそも中国語の漢詩「絶句」の構成手法である。よって、中国語を母語とする台湾人の学習者にとって馴染みの深い表現技法でもある。しかし、「起承転結」の「転」は詩や小説などのような文学作品のジャンルには適切であるが、論理的な文章には不向きとなる、という意見もある。それは論理的な文章は筋道を立てて展開させることが大事で、これまでの文脈とまったく関係のない別の話を導入する、という「転」の技法を入れると、読み手が話の展開を予測できなくなってしまい、また、論理の飛躍が生じてしまうような恐れがあるからである。

しかし現在、「転」の技法は話題の転換によって別の視点から題を論ずるというように一般化されるので、論理的な文章に用いられた例もしばしば見受けられる。石黒 (2006: 139) では「転」は大きく話題の転換と場面の転換に分かれると述べている。その論理的な指標として、転換の接続詞(「ところで」など) および逆接関係を表す接続詞(「ところが」、「しかし」など)の使用が考えられると指摘している。この節ではそれを手掛かりとし、学習者の作文における「転」の実態を探ってみる。

考察結果によると、内容に「起」「承」「転」「結」と4つの構成を備えた文章が3つのみであった。この3つの文章の改行パターンは以下のようにになっている。

表4 四部構成の意見文に見られた改行パターン

		問題なし	問題あり
起	背景説明のみ	1	
	問題提起のみ		
	両方行う	1	
	その他		1
承	接続語句		
	事柄・話題変化	3	
転	接続語句	3	
	事柄・話題変化		
結	接続語句		
	事柄・話題変化	3	

*文章数：3

表4で分るように、「起」の段落で背景説明のみ行う文章と背景説明・問題提起両方行う文章がそれぞれ1つあった。「起」は「内容を詠い起す」という意味で、文章の出発点でもある。よって、テーマに関連するような説明は読者に理解させるための必要要素となっている。例10がその例である。それに対し、最初の段落で直ちに主張を表明し、「起」の役割としてやや不適切だと考えられるのは例11である。

例10 最近、日本の芸能界は酒井法子のドラッグ濫用の問題で騒いでいた。今年7月、警察は酒井さんの住所から、大量の興奮剤を捜し出し、酒井さんを逮捕した。2週間後、酒井さんも旦那さんと一緒に興奮剤を使っているということを自白した。長い間ずっと「清純派」として人気があった酒井さんはなんとドラッグに溺れているなんて、みんな驚いていた。

(テーマ：芸能人の過ちについて・「起」 C49)

例11 人が公共乗り物内で携帯電話を利用することは賛成できません。

(テーマ：公共乗り物内での携帯電話の利用とマナー・「起」 C84)

「承」の部分には論理的な標識の使用が見られず、いずれも別の話題で論を進める。「転」では、「逆接」という論理関係を示す接続詞「でも」、または「しかし」が用いられる。また、「転」によって導かれた内容は逆の立場で論じたものであり、従来の「転」の技法と異なる使用が見られた。(下線は筆者による)

例12 でも、芸能人も普通の人だから、完璧な人ではない。この人達の過ちを広げる必要もない、という意見も出てくる。

(テーマ：芸能人の過ちについて・「転」 C49)

例 13 しかし、携帯電話は現在の人々にとって大切な連絡工具ですから、もし交通機関の中で携帯電話の利用を禁止するなら、いろんな問題があらわれると思います。たとえば、家族からの緊求電話など、でなければならぬ場合もあります。

(テーマ：公共乗り物内で携帯電話の利用・「転」 C84)

例 14 しかし、今の台湾で中国語が母語なのに英語より下手な人がたくさん増えてきたので、英語より中国語のほうが必修科目にしなければならないという意見もあります。

(テーマ：大学で英語を必修科目にすべきか・「転」 C28)

最後の「結」の部分に関しては、3つの文章とも簡単なまとめや解決策についての叙述が見られる。

4.3 結び

以上見てきたように、この節では「形式段落」と「意味段落」に分けて段落の分け方を考察した。形式段落から見れば、全文が1段落または2段落によって構成される文章は全体の25%に近かった。これによって一部の学習者には段落意識が欠如していたと言えよう。また、段落の長さに関する考察では、150字以下の段落が極端に多いことが分った。十分な作成時間を与えなかったからであろうと反省する。

意味段落から見れば、「論理標識」の使用より「事柄・話題の変化」による改行が主な手段として用いられる、という結果が得られた。また、学習者の使用上の問題点として、文章レベルでの接続語句の機能を把握していないことが挙げられるが、「事柄・話題の変化」に関しては、一つの事柄を複数の段落に渡って述べることや、または複数の事柄を一つの段落にまとめて書くという傾向があった。日本語の文章では、いくつのまとまった意見を書くかによって段落の数を決めるのである。それを意図的に指導に取り組みせ、たとえば、文章の骨組みとなる中心文作成の指導などを通して学習者の段落意識を高めていく必要がある。

また、学習者は改行意識を持っているが、「はじめ」→「なか」→「おわり」といった文章全体の構造を意識したうえで論を展開させる能力が身につけていない。それを育成するための指導として、段落の相互関係を読み取ることによって文章の論理構造を理解させることが重要である。リテラシー教育の重要性がますます高まっている現在、書くという言語活動と読解教育との連携を図った取り組みが必要だと考えている。

5. おわりに

本稿は文章の構造に着目し、段落の働きを確かめながら学習者の文章における改行意識を探る目的で行われた。今回の考察によって、学習者には改行意識があるが、段落の働きについて認識不足

であろう，という結果が得られた。文章レベルでのつなぎ言葉や段落機能の理解を深めていくとともに，論理構造を読む学習及びそれに基づいた文章の展開法が表現教育のために必要なのではないかと考える。今後はデータの充実化を図り，更なる見直し，検討を加える必要があると思われる。

〈注〉

- (1) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説—国語編—』では、「相手や目的に応じ，調べたことなどが伝わるように，段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに，工夫をしながら書こうとする態度を育てる。」を第3学年及び第4学年の書くことの目標とし，「自分の考えを明確に表現するため，文章全体の構成の効果を考えること。」を第5学年及び第6学年の指導内容としている。同年出版された『中学校学習指導要領解説—国語編—』においては，第2学年では「書いた文章を読み返し，語句や文の使い方，段落相互の関係などに注意して，読みやすく分りやすい文章にすること」を指導のねらいとし，第3学年では「論理の展開を工夫し，資料を適切に引用するなどして，説得力のある文章を書くこと。」を具体的な指導事項としている。そして，2010年出版された『高等学校学習指導要領解説—国語編—』では「(前略)「論理の構成や展開を工夫」することは，説得力のある文章を書き，自らの考えを相手に納得させ，同意や共感を得るために欠くことができない。(中略) 具体的な工夫としては，「序論—本論—結論」，「現状認識—問題提起—解決—結論—展望」などという文章の組立てや進め方を国語総合の「論理の構成や展開を工夫して書くことに関する指導内容」の項目としている。
- (2) ここでの「段落数に問題がある」とは，1段落のものや，5段落以上といった段落の区切り方に問題があると考えられる文章のことである。
- (3) 「必要要素なし」とは序論あるいは結論がない例，または適切な内容が書かれていない，という内容的な問題がある文章のことを指す。
- (4) 作文の課題を自分で決められない学習者に次の5つの題を出した。「インターネットの匿名性における問題点」，「大学で英語を必修科目にすべきか」，「未成年の犯罪率の上昇」，「タバコの弊害」，「公共乗り物内での携帯電話の利用とマナー」。

参考文献

- 秋田喜代美・久野雅樹 (2001)『文章理解の心理学』 北大路書房
- 石黒圭 (2006)『よくわかる文章表現法の技術Ⅳ—発想編—』 明治書院
- 市川孝 (1978)『国語教育のための文章論概説』 教育出版
- 金宥暉 (2006)「日本語学習者の書く文章のわかりにくさについて：言語的側面と認知的側面からの原因分析」『ポリグロシア』12 立命館アジア太平洋研究センター pp. 47-59
- 久保田修 (1993)『日本語の表現』 双文社出版
- 佐久間まゆみ (1997)『文章・談話のしくみ』 おうふう
- 佐藤喜代治編 (1996)『国語学研究事典』 明治書院
- 高左右美穂子 (2006)「「段落間のつながりに着目して論理的な思考力を培う」研究授業の考察」『全国大学国語教育学会発表要旨集』110 全国大学国語教育学会 pp. 211-214
- 田中美也子 (1998)「作文能力発達に関する縦断的研究その(三) 一段落意識形成の過程に関する一考察」『語学文学』36 北海道教育大学語学文学会 pp. 1-9
- 槌田和美・今井美登里 (2008)「留学生の文章のわかりにくさの原因を探る—アカデミック・ライティングの効果的指導のために—」『桜美林言語教育論叢』4 桜美林大学言語教育研究所 pp. 25-42
- 寺村秀夫他 (1990)『ケーススタディ日本語の文章・談話』 おうふう
- 西田直敏 (1998)「段落とその接続について」『日本語学』7-2 明治書院 pp. 41-49
- 平井昌夫 (1958)「談話・文章の展開」『国語教育のための国語講座』第6巻 朝倉書店 pp. 113-174

- 森元智博・平真木夫 (2001)「文章の読みにおける段落の働きについての研究」『日本教育心理学会総会発表論文集』43 日本教育心理学会 p.573
- 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説—国語編—』 東洋館出版社
- (2008)『中学校学習指導要領解説—国語編—』 東洋館出版社
- (2010)『高等学校学習指導要領解説—国語編—』 教育出版株式会社

付記：

本稿は「2009年東呉大学日語教学国際会議」(2009年11月28日, 台湾・東呉大学)にて, 口頭発表した内容に加筆修正したものである。